人生の移行は、なぜ他者の承認を必要とするのか

――通過儀礼・ナナメの関係・SNS時代における共同性の変容――

松本亜紀

序章　問いの所在――なぜ今、通過儀礼なのか

筆者が主宰する子育てサロンには、毎月、乳幼児を連れた母親たちが集まる。その多くは、SNS上では積極的に育児の記録を発信しているにもかかわらず、「こんなに孤独だとは思わなかった」という言葉を口にする。なかには、「百件を超える〝いいね〟がつくのに、誰にも本当のことを言えない」という声も聞かれる。この齟齬は何を意味するのか。

現代社会において、産育儀礼はかつてないほど可視化されている。(1) マタニティフォト、出産報告、初宮参りの晴れ着写真、七五三の前撮り、卒乳記念など、記録と共有の手段は多様化し、産育をめぐる儀礼的実践は形を変えながら氾濫している。一方で、産後うつの増加、育児孤立の深刻化、ワンオペ育児という言葉はすでに社会に定着した状況にある。

儀礼の外形が豊かになるほど、その内実との齟齬はかえって深まっているのではないか。筆者はこの齟齬の根

底に、かつて生活世界に深く根差していた通過儀礼の衰退があると考えている。

厚生労働省の報告によれば、令和六（二〇二四）年の出生数は六十八万六〇六一人となり、初めて七十万人の大台を割り込み、合計特殊出生率は一・一五と統計開始以来の最低値を記録した[2]。少子化が示す問題は、子供の数の減少にとどまらない。出産・育児という本来は祝福されるべき人生の根本的な移行を、親が（多くの場合は母親が）周囲の支えなく独りで担わざるをえない構造そのものが、命を産み育てることを「負担」として経験させているのではないか。

これらの問いは、筆者がこれまで展開してきた産育をめぐる関係性と身体観に関する一連の研究の延長に位置する[3]。本稿はそれらの研究が積み重ねてきた論点を踏まえながら、産育儀礼における承認様式の変容という問いをあらためて前景化し、「見られること」と「関わられ続けること」の差異という新たな分析軸を導入するものである。

本稿が産育儀礼に焦点を当てるのは、妊娠・出産・育児という過程が、人の一生においてもっとも劇的な役割変化を伴う移行経験でありながら、現代においてもっとも「継続的伴走者」の不在が顕著な領域だからである。産後うつの有病率は産後女性の一〇〜一五％と推計され[4]、妊産婦死亡における死因の第一位が自殺であることも報告されている[5]。これは個人のメンタルヘルスの問題である以前に、「移行期の人間を誰が支えるのか」という社会的装置の問題にほかならない。本稿はこの問いを、産育儀礼における承認様式の歴史的変容という民俗学的視点から検討し、民俗事例と現代的実践を横断的に参照しながら、共同体的支援の現代的再編の可能性を論じるものである。